

# かわさき<sup>そら</sup>宙と緑の科学館 開館50周年記念事業の展開

教育委員会事務局青少年科学館 指導主事 杉浦 孝弘



## 1 はじめに

川崎市多摩区の生田緑地内に立地する「かわさき宙と緑の科学館(以下「科学館」という。)」は、年間約25万人の方々が利用している(令和元年度)。令和3(2021)年8月には開館50周年を迎え、より多くの市民が楽しみ、科学館の価値を再確認できるよう、さまざまな記念事業に取り組んでいる。

## 2 施設概要

昭和46(1971)年8月15日、当時公害のまちと言われていた川崎の子どもたちに「美しい星空を見せてあげたい」との願いから、県内2番目のプラネタリウム施設として開館した(県内初は神奈川県立青少年センター)。昭和57(1982)年2月27日に本館が開館し、同年5月に市内唯一の自然科学系の登録博物館となった。



開館当時の科学館

平成24(2012)年4月28日に、通称「かわさき宙と緑の科学館」としてリニューアルオープンした。世界最高水準のプラネタリウム設備と一新された常設展示設備等を備えた自然学習棟、調査研究や資料収集等の設備を備えた研究管理棟から成る。これらの設備や生田緑地の自然環境等を活用しながら、自然・天文・科

学の3分野において、資料の収集・保存、調査・研究、教育普及活動等に取り組んでいる。



リニューアルした科学館

50年の節目を迎えた科学館は、基本理念を「市民とあゆむ 宙(そら)と緑の科学館」として、市民との協働、学校教育との連携等、市民に開かれた博物館としてさまざまな年代やニーズに対応した事業やイベントを実施している。

## 3 記念事業の実際

令和3年度を開館50周年記念イヤーと位置づけ、子どもたちから成人・シニア世代までそれぞれのニーズに応える記念事業を実施した。

### (1) プラネタリウム・フュージョン新番組

#### 「過去と未来への旅」

利用者の目的の多くはプラネタリウム鑑賞である。学習投影を除くプラネタリウム利用者(一般投影)は、平成30年度84,394名、令和元年度73,651名、緊急事態宣言に伴う2カ月間の臨時休館があった令和2年度も34,651名の市民が利用した。市民が利用するプラネタリウム投影の中にも子ども向け投影、一般投影の他に「フュージョン投影」がある。プラネタリウム投影機



MEGASTAR III FUSION

フュージョン新番組の  
広報用ポスター



「MEGASTAR III FUSION」の性能を活かしたプログラムで、高画質の動画と精緻な星空投影を融合させ、風景にとけこむ自然な星空をリアルに再現する番組である。毎月限定公開していたフュージョン番組投影は利用者に高い人気があり、投影回は常に満席となっていた。

50周年の節目に、「MEGASTAR III FUSION」の制作会社・大平技研と映画監督・上坂浩光氏(はやぶさに関わる映像作品制作)に委託し、制作したフュージョン新番組「過去と未来への旅」は令和3(2021)年4月29日から公開された。感染防止対策として、コロナ前の132席から、利用者の間隔を担保した70席にて公開し、以前は月に2回公開していたフュージョン番組を毎週土日祝日に1回と回数を増やして投影スケジュールを編成した。コロナ禍においても、毎回の投影利用が満席になることから、利用者のニーズが高いことが伺え、プラネタリウムをはじめとする天文事業に対する市民の期待の大きさを確かめることができた。

## (2)記念写真展

科学館の開館当時から今日までのあゆみに関する写真展を開催し、来館する市民に節目の年度であることの周知を図った。企画展示専用のスペースを持たない科学館では、多くの利用者の目に留まるプラネタ



記念写真展の様子 令和3(2021)年6月19日～8月29日

リウムドーム壁面で写真パネルを掲示した。50周年記念式典の前後であり、年間で来館者が最も多い学校の夏季休業期間を含む令和3(2021)年6～8月に開催した。

## (3)開館50周年記念式典

開館以来、科学館運営にご尽力いただいた来賓、地域、市民団体、学校関係者の方々に招待して、これまでの歩みを振り返り、科学館の魅力を多くの市民に発信するため記念式典を令和3(2021)年7月17日に開催した。



記念式典第1部の様子



式典第2部プラネタリウムドーム内の様子

記念式典は、科学館の特徴を活かすことをねらい、2部構成にて展開した。第1部では、市長をはじめとする主催者と来賓の方々、総勢58名に参加いただき、挨拶や来賓紹介等のセレモニーとして実施した。来賓代表として橋本勝市議会議員、川崎市名誉市民の藤嶋昭氏、元館長で川崎市文化賞受賞の若宮崇令氏に、科学館の今後への期待など、御挨拶をいただいた。

第2部では、会場を科学館の学習室からプラネタリウムドームに移し、式典当日から公開した50周年記念番組「かわさきの星空50年」と、前述のフュージョン新番組「過去と未来への旅」を投影した。川崎市出身のプラネタリウムクリエイターである大平貴之氏が開発



した「MEGASTARⅢ FUSION」は科学館の事業の核となり、多くの市民に好評である。昭和46(1971)年にプラネタリウム館としてスタートした科学館の魅力を改めて知っていただく機会とした。

記念式典開催時期は、まん延防止等重点措置期間であったため、学習室及びプラネタリウムドーム内での3密回避として、会場内の換気、参加者同士の距離の確保を徹底した上で開催した。

#### (4)プラネタリウム50周年記念番組

##### 「かわさきの星空50年」

科学館の主要事業であるプラネタリウム投影では、開館以来、科学館職員が時事の天文現象などを盛り込み、毎月の投影番組を構成し、常時生解説にて投影する「川崎方式」を実施してきた。

川崎市と科学館の50年のあゆみを当時の天文現象や天文学の発展を織り交ぜながら紹介する記念番組を制作し、記念式典を開催した令和3(2021)年7月17日午後から一般公開を開始した。記念式典での投影を皮切りに、多くの市民が利用する夏季休業期間である8月末まで公開した。



「かわさきの星空50年」  
広報用ポスター

#### (5)記念企画展「川崎の生きもの」

これまでに科学館と「特定非営利活動法人かわさき自然調査団」が協働で行ってきた調査で確認された動植物を紹介する刊行物『川崎の生きもの』を発刊した。科学館の学習室を会場に行った企画展では、本に掲載



した市域で確認された動植物や絶滅危惧の生物についてパネルや標本を展示し紹介した。多くの市民が市域の自然環境を知る機会として夏季休業期間に開催した。

令和3(2021)年7月27日から8月22日の開催期間の24日

間で延べ5,215人が見学した。来館者からは「市内に絶滅危惧種が生息していることを知った」「生き物にでき

ることを家族で話題にできた」という感想があった。

企画展示の専用スペースを持たない科学館だが、次年度以降も来館者の興味関心を引く、企画展を計画していく。

#### (6)記念科学講演会「素数ゼミの謎を科学する」

自然科学の魅力の発信をねらい、川崎市在住の静岡大学名誉教授・吉村仁氏による「周期ごとに発生するゼミ(素数ゼミ)の謎」をテーマとした数理生態学についての記念講演を行った。記



北米に生息する素数ゼミ

念式典同様、感染防止対策を徹底し、中学生以上を対象に、定員45名にて令和3(2021)年11月3日に開催した。

講演会后、参加者のアンケートからは、「興味深い話で、勉強になった」「数学と生物が関係した話で、奥深かった」等の感想を多数いただいた。令和2年度からの新型コロナウイルス感染防止として、自然・天文・科学系のイベントに制限をかけながら開催していたが、講演会後の意見から、「機会があれば、積極的に学びたい」という生涯学習に対する市民の関心の高さを確かめることができた。



記念講演会の様子

#### (7)科学イベント

##### 「科学であそぼう!かわさきぷりんフェスティバル」

日頃から科学館事業を支える市民ボランティアとの協働イベントを令和3(2021)年11月28日に開催した。

普段、週末に開催している科学実験教室「サイエンス教室」や初歩的講座として位置付けて簡単な科学工作等を体験できる「サイエンスワークショップ」には、多くの子どもたちが参加している。科学系事業の多くは、市民団体との協働にて開催している。科学館利用

の主層である小学生と保護者、事業やイベントを支えている市民ボランティアとの交流をねらい、サイエンスフェスティバルを開催した。

コロナ禍での安心安全に配慮し、換気や参加者同士の距離を確保して開催した。定員人数を制限したことにより、イベント規模は大きくないが、当日は約180名の小学生親子が市民ボランティアや科学館職員と科学工作を体験した。



小学生対象科学イベントの様子

## 4 刊行物等の制作

50周年を記念した刊行物の制作・販売を行った。開館から50年の自然・天文・科学等の取り組み、事業を紹介する記念誌『川崎市青少年科学館開館50年のあゆみ』、市民団体との協働調査研究の成果を紹介する『川崎の生きもの』を制作し、館内ショップにて販売した。また、50周年記念の「クリアファイル」「オリジナル巾着袋」も販売している。

## 5 記念事業に関わる広報

年度内での開催時期等を考慮し、バランスを考えて計画・配置した記念事業を多くの市民に周知を図ることが来館者増の第一歩となる。記念事業の広報を次のように行った。

### (1)50周年記念街路灯フラッグの掲示

科学館50周年の大型フラッグを制作し、登戸駅構内や多摩区役所、向ヶ丘遊園駅から生田緑地までの街路灯に掲出した。

### (2)50周年記念の広報刊行物

○多摩区観光ガイドブック『はなもす』

青少年科学館50周年特集の発行(3万部)

○科学館だより50周年記念号の発行(2万部)

○市政だより7月1日号にて科学館特集掲載

### (3)科学館主体でのSNS活用

科学館ホームページやFacebook、Twitterにて50周年事業やイベントについて随時発信を行った。



科学館マスコットキャラクター  
かわさきぷりん

## 6 おわりに

自然・天文・科学の各分野においては、さまざまな年代・ニーズに対応できるよう、次の視点を大切にしながら年間を通して複数の記念事業を展開した。

### ①日頃から科学館を利用する市民のニーズに応える

プラネタリウムや実験教室を楽しみに、リピーターになっている利用者に人気の高い事業を重点的に実施することでニーズに応えた。

### ②科学館を現在まで支え、交流してきた市民ボランティアや市民団体と協働する

市民ボランティアは、自然・天文・科学の各分野の事業を協働で進めたり、講師として利用者との交流や学び合いを導いたり、科学館に欠かせない存在である。記念式典で50年のあゆみを振り返り、さまざまな事業を協働で行うことで、市民参加の重要性を確認した。

### ③科学館の価値や魅力を発信し、初めて利用する市民を増やす

50年という大きな節目を迎え、広く市民に広報することで、新たな利用者の増加を狙った。プラネタリウム新番組やイベントを利用した市民に、科学館事業や他のイベントの周知を図った。一つのイベントをきっかけに次の事業利用へとつなげた。

一つの社会教育施設としてあゆんできた50年は、多くの市民に支えられた時間であったことを、館職員一同が実感できた。今後も、市民のニーズを考え、市民と協働で事業を進め、市民に開かれた博物館を目指していきたい。